

# 學 報

Kobe College Bulletin

ISSN0389-164X

NO. 190

2020.12.18

神戸女学院

学報委員会

## コロナ禍、創立145周年（2020年）、そして創立150周年（2025年）

理事長・院長 飯 謙

### Bridging Generations

150Years of Excellence in Women's Education

未来を生きる人たちのために。

本年初頭から猛威を振るうコロナ禍のさなかにあつて神戸女学院に連なるすべての皆様にお見舞いを申し上げます。そのような危急の事態にもかかわらず、保護者・ご関係の皆様、卒業生・めぐみ会、組合、役員、教職員など多くの方々から、神戸女学院の学修を支えるためにと、思いを越えるご厚志を賜りました。この場をお借りして、篤く御礼を申し上げます。ありがとうございます。女学院生のために、大切に用いさせていただきます。

本稿ではこの混乱を見つめ、5年後に迎える創立150周年を展望する所感を述べたく存じます。

ただいま「混乱」と書きました。2020年11月末の段階で、感染拡大でなかなか先が見通せない状況です。早期の収束を願うものですが、しかしその混乱が「魔法のように消えてなくなる」ことはなく、なお長期にわたる取り組みが必要であるとの認識に立っております。

大学の学部生・院生の皆さんには、本年春からの入構制限により、歴史ある学舎に身を置いて研究を共にできない状態が続いています。特に大学1年生の多くは、入学以来一度も教室で受講していません。中高部生の皆さんも、毎日岡田山に通うことはできていますが、行事の縮小・中止や課外活動の面

など、学校生活に不自由さを覚えていることでしょう。ご家庭の皆様も同様に感じておられることと拝察いたします。どれもまことに残念、かつ申し訳ないことです。人知の限界で力の及ばぬ中ではありますが、新型コロナウイルスによる現状を受け止めつつ、神戸女学院の教育環境を整えていくよう力を尽くしてまいります。そしてこの時期にわたくしたちが体験した不安や感染拡大防止には最大限に注意を払いながら、他方、このような時期であるからこそ共有することができた、互いに配慮し合う意識を大切にしていきたいと思います。そこに神戸女学院の個性が見えてくると信じるからです。

今般のコロナ禍が、本学院が節目を迎える時期に起こっていることには（まだ途上ではありますが）再発見すべき重要な意味が潜んでいると思えます。本年10月12日、神戸女学院は創立145周年の記念の日を迎えました。チャプレンの中野敬一先生が、定時の大学礼拝で祈りをささげてくださいました。その日の午後、創立150周年に向けた特別なウェブサイトを開設し、標記の言葉を中心に据える「150周年メッセージ」を发出了しました。そこに掲げられた“Bridging”は、本学院第5代院長シャーロット・デフォレスト先生が大学部設置や岡田山移転を目前に

控える時期にしたため、語った書簡や講話から示唆を受けたものです。この言葉には、神戸女学院の歩みを顧み、現実を見つめ、未来を眺望する内容が含意されています。

以下、このメッセージが制定された経緯とそこに込められた願いを述べておきたいです。神戸女学院で150周年を意識した討議が明確に開始されたのは2018年秋のことでした。学院各部門の責任者が集う常務委員会や拡大部長会で総論的な意見交換を行い、中高、大学、法人がそれぞれにもち帰って目指す姿を深め、その結果を改めて常務委員会と拡大部長会で議論しました。それは2019年3月の理事会において承認を受け、「神戸女学院創立150周年にあたり——KC 150th Anniversary and Beyond」という短い文書にまとめられ、この祝祭の「基本方針」と位置づけられました。現在は上に述べたウェブサイトで見ることができます。当該文書では、本学院が開校以来、キリスト教主義、国際理解の精神、リベラルアーツ教育、少人数制、女性教育に軸足を置き、高い評価を受けてきたことを述べ、これからも「愛神愛隣」への理解を深め、受け継いできた教育のスタンスをいっそう堅固なものとしていくと宣言しています。その後、2020年3月にウェブサイトで公にした「中期計画」においても同様の方針を打ち出しています。

この間2019年11月に創立150周年事業にかかわる助言をいただくパートナー企業を選定しました。学院総務課の担当者と共にこの作業によく取り組んでくださり、学院関係者へのインタビューと協議を重ね、デフォレスト先生のお言葉を心に留める中で、上記の“Bridging…”に着目されました。そのヒントとなった言葉を三つ紹介いたします。

一つは、デフォレスト先生の説教の録音より採られたものです（「ある日の感想」『タイハイレコード』）。これは現存する唯一の先生の肉声ですが、先生は橋を建設する職人のエピソードに触れておられます。ある人が、職人に、そこまで頑丈な橋を造る必要はないだろうと声をかけたところ、職人は、この橋は自分たちの時代のためではなく、後の人のためだと述べた、と。宣教師の先生方がよく口にされたという合言葉“Non sibi”（自分のために、ではなく[他者のために]）を彷彿とさせます。この言葉がわが国における初期のキリスト者、また女学院生に多大な影響を与えたことは、改めて繰り返すまでも

ありません。「橋」と共に、150周年メッセージを根拠で支えるキーワードです。

第二は、デフォレスト先生が米国の友人に向けて1919年6月（神戸女学院「専門部」の「大学部」改称認可直後）に書かれた手紙です。これは神戸女学院が女性の教育機関として西日本で初めて「大学」と名乗ることが許された時期でした。女性への教育を批判することに人々が何の疑問も感じなかった時代のことです。デフォレスト先生はこの書簡で、“not only our own generation”というフレーズを用い、大学部における教育の必要性、その環境とプログラムの充実を訴えておられます。

第三は、先生が1930年10月31日、すなわち岡田山移転事業が具体的に開始された時代、在米神戸女学院財団（KCC）の支援者に宛てた書簡からの言葉です。先生は、「われわれは、よりよい共同体と世界を建設する未来の若者がわたり行く橋を建設している」と述べ、この仕事の意義を語っておられます。このフレーズについては、英文学科の白井由美子先生が、音楽学科の津上智実先生、総合文化学科の中野敬一先生と携わった宣教師文書に関する共同研究において、デフォレスト先生の教育観を雄弁に物語る箇所として指摘しておられたことも選定にあたって大きな役割を果たしました。

デフォレスト先生は大阪で宣教師の家庭に誕生され、後に召命を受けて宣教師となり、神戸女学院に生涯を献げられました。本学院が大学課程を有する教育機関であること、小規模ながらも人文系から社会科学、自然科学さらに芸術系まで擁するリベラルアーツ・カレッジであること、岡田山キャンパスという、キリスト教主義と国際理解の精神、リベラルアーツを体現した校舎群を与えられていること、どれも先生のお働きを抜きに語ることはできません。

このたび、デフォレスト先生が「架橋する」ことに大きな使命を感じておられたと、改めて知るところとなりました。わたくしどもの実情は、隣人に思いを馳せる余裕もなく、自分のことだけで精一杯であり、かつ刹那的な事象に走りやすい体質ということかもしれません。いま、橋を建設すること、生徒・学生諸姉に隣人を覚えてその橋を渡るよう促すこと、そしてわたくしたち自身もその橋をわたり、隣人に仕えるよう招かれていること——コロナ禍の不安のうちにある中、先達からのメッセージとして、心に刻みたく思います。

私たち神戸女学院は2025年に  
創立150周年を迎えます。

# 150<sup>th</sup>

## Bridging Generations

150 Years of Excellence in Women's Education

未来を生きる人たちのために。

川べりに、橋を一生懸命に造っているおじさんがいました。  
その様子を見た人は、こう言いました。  
「そんなに骨折って丈夫に造らなくてもいいじゃないですか。  
この橋はそんなに長くお使いになるわけではないでしょう。」  
ところがおじさんはこう答えたのです。  
「これを築いているのは、自分のためではありません。  
あとの人のためです。」  
(C.B.デフォレスト第5代院長の講話「ある日の感想」より)

私たちがキリスト教主義リベラルアーツ教育を通して育んできたのは  
このような考え方を持つ人であると言えるでしょう。

自分のためではなく  
未来を生きる人たちのために  
自分の得た力を使うこと。

その使命を一人ひとりが見出し、  
まっすぐ向き合うことができるよう  
広い視野で世界を見て、学び、考えるのです。

ここに連なるすべての女性が  
次なる未来を想い、創り出せる人であるように。

神戸女学院はこれからも  
さらなる未来へと繋がる橋を築いていきます。

 神戸女学院

創立150周年特設webサイト <https://150th.kobe-c.ac.jp/> 2025年に向けてさまざまな情報を発信していきます。



150周年メッセージポスター

神戸女学院150周年メッセージは、  
こちらからご覧ください。  
<https://150th.kobe-c.ac.jp/>



## 「150周年メッセージ」制定について

2025年の学院創立150周年をひかえ、2019年度より法人、大学、中高部の事務職員によって構成される「150周年事務局」を立ち上げました。

2019年度下期に、プロジェクトパートナーとなる企業を数度にわたるプレゼンテーションを経て選定し、2020年度上期より150周年メッセージを制定することから本格的な活動を開始しました。

緊急事態宣言による出勤制限もあり、ミーティングもままなりませんでしたが、オンライン会議なども活用しつつ、拡大部長会、理事会での議論を経て神戸女学院創立145周年の記念日である10月12日(月)に「150周年特設 WEB サイト」を開設し、メッセージ“Bridging Generations”を発信しました。

このサイトでは、学院の歴史や考え方について動画を含めわかりやすい形で発信しております。特に動画ではアナウンサーの高井美紀さん(英文学科卒業生)にナレーションをご担当いただきました。ぜひご覧いただきたく存じます。

メッセージをふまえて、引き続き学生生徒、卒業生、教職員等を対象にロゴマークの募集をおこなっており(12月11日締切)、審査ののち2020年度中に決定する予定です。

これから、150周年に向けさまざまな施策を検討・実行してゆくにあたり、皆さま方のご協力をお願いする場面も多々あるかと存じます。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

(150周年事務局)



動画コンテンツの一場面  
デフォレスト先生「ある日の感想」より

## 神戸女学院教育振興会寄付金のご報告

新型コロナウイルス感染症流行にともなう緊急支援のお願いに対し、例年を上回るご芳志を賜り厚く御礼申し上げます。2020年度については特に使途指定のない限り全額を「生徒・学生の支援」に活用させていただきます。

### 【ご寄付実績】

820件 44,350,856円(古本募金含まず)  
(11月23日現在)

尚、めぐみ会様からも多大なるご支援をいただいております旨申し添え、厚くお礼申し上げます。

教育振興会では、引き続き募金のご協力をお願いしております。詳しくは、ホームページをご覧ください。

神戸女学院教育振興会ホームページ  
(スマートフォンにも対応しています)



神戸女学院教育振興会 検索

(教育振興会事務局)

## 創立145周年記念 神戸女学院愛校バザー中止について

2020年5月23日(土)に予定しておりました「創立145周年記念 神戸女学院愛校バザー」は新型コロナウイルス感染症流行拡大にともない、2020年10月31日(土)に延期しましたが、夏以降も状況が好転しない中、やむを得ず2020年度については中止を決定しました。

来年度は開催できますようお願いとともに、「新しい生活様式」に沿った形で、安全・安心を確保できる開催スタイルを検討してまいります。

## KCCだより

KCC-JEE  
100<sup>TH</sup> ANNIVERSARY ANNUAL MEETINGKCC-JEE 理事  
学校法人神戸女学院評議員

水野 多美

1920年11月22日、Kobe College Corporation（略称KCC、現 KCC-JEE）は団体登録されました。

今年でちょうど設立100年となり、9月に本拠地シカゴにて100年祭のお祝いで集まることを楽しみにしておりました。春からのコロナ禍の為、残念ながら、来年へ延期と決めましたが、やはり今年にお祝いをと、急遽、オンライン Zoom での開催を企画しました。シカゴ・ダウンタウンでの集まりでは、70人集まれるかしら、と集客を心配していたのが、オンラインという代替のおかげで、総勢100名を超える参加をいただきました。当日のご参加に加え、前もってお送りいただいたビデオでもご参加いただきました。KC からは飯謙院長、斉藤言子学長、森谷典史中高部長および中高部教頭、総務部長、院長室課長、院長室職員の方がビデオメッセージでバーチャル参加していただきました。

DeForest 先生の詩が美しい音の上に流れる学院歌 Beauty Becomes a College、斉藤言子先生の歌声を聞かせていただき、感激しました。ドローンで撮影された緑豊かなキャンパスが広がり、美しい学舎、母校が懐かしく、誇らしく思ったのは私だけでは無いと思います。

100年祭を無事に終了して、当期 President/ Roberta Wollons からの挨拶にも、バーチャルでの会でありましたが、多くの方々と一緒にでき、楽しい懐かしいひと時を過ごせたことを心から感謝し、お礼申し上げておりました。

KC 卒業生 N 子さまから、ハワイ大学の日本語講師として活躍中で、…若くなった、つまり、神戸女学院時代に心だけ戻りました…、とお便りをいただきました。

KC 卒業生の先輩・後輩方、今まで KCC-JEE プログラムの活動に役員・メンバーとして関わって

くださった方々にご参加いただき、懐かしい顔に会えたと喜んでいただけたことは本当にありがたい機会となりました。

世界大戦を越えて続いたこの繋がりを次の100年も続けていくために、大事な基金を大切に有効活用させていただけるよう、理事をはじめとしてプログラムに参加活動していただいているコミッティメンバー、卒業生、特に北米在住の卒業生、プログラムに参加した方々と共に、小さな努力を続けていきたいと思えます。KCC-JEE の活動に興味のある方、100年祭の当日録画にご興味がある方は、ぜひ、サイト <https://www.kccjee.org> あるいは事務所 Office@kccjee.org へご連絡をよろしくお願いいたします。



## AGENDA

1. Greetings
2. Opening remarks
3. Greetings from the Chancellor of KC
4. Greetings from the Consul General of Japan in Chicago
5. Elections to the Board
6. KCC JEE history
7. Video message from former board members
8. Program updates and video message
9. Video message from KC and KC Alumnae
10. Performance by the President of KC
11. Conversation
12. Closing remarks

100<sup>TH</sup> ANNIVERSARY ANNUAL MEETING PROGRAM  
当日のプログラム

## 2020年度 宗教強調週間

## プログラム

(11月9日～11月13日)

11月9日(月)			
早天祈祷会	学院チャプレン	中野 敬一	
中高部礼拝		中野 敬一	
チャペルアワー		中野 敬一	
11月10日(火)			
早天祈祷会	チャプレン	大門 光歩	
中高部礼拝			
「神を愛する」	中高部長	森谷 典史	
チャペルアワー			
「他者と共に」	チャプレン	大澤 香	
全教職員礼拝			
「明らかな良心をもって」			
本学院理事、日本基督教団神戸教会牧師			
		菅根 信彦	
11月11日(水)			
早天祈祷会	チャプレン	大澤 香	
中高部礼拝			
「自分を愛する」	チャプレン	安森 智司	
チャペルアワー			
「ヤコブの見た夢」	院長	飯 謙	
中高部 P.T.A. のための宗教講話			
「人生の目的」	中高部長	森谷 典史	
学生寮夕拝	学長	斉藤 言子	
11月12日(木)			
早天祈祷会	チャプレン	安森 智司	
中高部礼拝			
「隣人を愛する」	チャプレン	大門 光歩	
チャペルアワー			
「メメント・モリ」	チャプレン	中野 敬一	
同窓生のための宗教講話		中 止	
11月13日(金)			
早天祈祷会	学院チャプレン	中野 敬一	
中高部礼拝			
「コルバン論争 ―愛神愛隣を考える―」			
		院長 飯 謙	
アッセンブリアワー			
「宗教音楽の会」	音楽研究科 2年生		

## &lt;大学チャペルアワー&gt;

11月9日(月)から13日(金)を宗教強調週間とし、特別礼拝をまもりました。このたびの新型コロナウイルス感染拡大に伴い、例年とは異なる様々な変更を余儀なくされました。外部講師によるチャペルアワーの講演は全て中止され、学内関係者によるプログラムとなりました。また、多くの学生が遠隔授業を受講しているため、講堂での礼拝に出席できません。そのため10日(火)～12日(木)のチャペルアワーでは、視聴覚センターの全面的なご協力のもと、学生・教職員のみを対象としたライブ配信をおこないました。多少の接続トラブル等はありませんでしたが、大きな問題なく全てのプログラムを終了いたしました。

9日(月)は中野敬一学院チャプレンによる奨励でした。今まさに困難な状況下で、不安に満ちた日々を生きる私たちですが、「新しい力と勇気を持って人助けの機会にする」というソール先生の言葉を心に刻み、実践する時だと教えていただきました。

10日(火)は大澤香チャプレンより「他者と共に」と題して、先生が学生時代に出会ったアイヌ文化について触れつつお話いただきました。他者と真に“出会う”とは、自分勝手に思い描くイメージで相手を判断することではなく、相手自身を知ろうとすることだと語られました。

11日(水)は飯謙院長が、創世記28章10節から19節をテーマに「ヤコブの見た夢」と題してお話くださいました。失敗や危機的状況をも大切な機会として用い、手を差し伸べてくださる神からの語りかけに耳を傾けて、歩んでいくことが大切だと述べられました。

12日(木)には中野学院チャプレンより「メメント・モリ」と題し、お話いただきました。死や別れ、物事の終わりの時について考えることが、自身の生き方を見つめることだとおっしゃいました。

13日(金)は「宗教音楽の会」でした。本学音楽学部元教授の Boris Bekhterev 氏をお招きしてのピアノコンサートを予定していましたが、来日が叶わず、音楽研究科2年生の方々が演奏をしてくださいました。

10日(火)の全教職員礼拝では、本学院理事・日本基督教団神戸教会牧師でいらっしゃる菅根信彦氏に「明らかな良心をもって」と題してメッセージをいただきました。続けて永年在職者表彰式がおこなわれました。長年ご奉仕くださった教職員の方々へ感謝のひとつを持つことができました。11日(月)の学生寮夕拝は、斉藤言子学長によるご奨励でした。オンデマンドでの動画配信をおこないました。

期間中、毎朝8時から早天祈祷会がまもられました。今年度は、残念ながら学生・生徒によるお話をうかがうことができなかったため、チャプレンによるメッセージをいただきました。神戸女学院に連なる者で、静かな朝の祈りの時間を共にまもることができ、大変嬉しく思います。

ご多忙の中、多くの方のお支えをいただき深く感謝いたします。恵みに満ちた一週間となりましたことをご報告申し上げます。

(チャプレン室)

### <中高部礼拝>

今年度の宗教強調週間は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、例年とは大幅に内容を変更して実施いたしました。

礼拝については放送礼拝とし、礼拝中の音楽奉仕も中止となりました。礼拝時間も平常通りの20分間としたため、授業時間も平常通りといたしました。

外来講師はお招きせず、11月9日(月)は中野敬一学院チャプレン、10日(火)は森谷典史中高部長、11日(水)は安森智司チャプレン、12日(木)は大門光歩チャプレン、13日(金)は飯謙院長がそれぞれの礼拝での奨励を担当いたしました。9日(月)の中野先生には年間標語聖句の説教をしていただき、10日(火)から12日(木)は、「神を愛する」「自分を愛する」「隣人を愛する」とテーマを設定し、13日(金)には「コルバン論争—愛神愛隣を考える」というテーマで飯院長に説教をしていただくという形で改めて「愛神愛隣」について考える機会をもちました。

11日(水)の午後にはP.T.A.宗教講話を講堂にて開催いたしました。森谷中高部長から「人生の目標」というテーマで講演をいただきました。97名もの参加があり、中高部の営みと教育の願いをお伝えする機会になりました。

毎年、放課後特別プログラムとして開催してきた「KCH白熱教室」も中止となりました。

毎朝の早天祈祷会も例年とは違い、会場を講堂とし、生徒、学生による証ではなくチャプレンの説教と祈りの会として守りました。感染予防のために讃美歌も歌わない形をとりました。中高部の生徒、教職員有志の参加者が大勢与えられて恵まれた時となりました。

例年と違う宗教強調週間となったために、「残念だ」という声も聞かれましたが、その声は通常の礼拝や例年のプログラムを「よいもの」「価値のあるもの」と捉えてくれている証なのだと感じています。

宗教強調週間に先んじて開催された高等学部の生徒総会では「愛隣について」というテーマで意見を出し合い、お互いの経験や考えから学ぶ時が与えられました。

先の見えない状況の中で、中高部では放送礼拝と講堂での礼拝(2学年)が続いていますが、礼拝の意義を確かめつつ、大切に守り、捧げてゆきたいと願っています。

(中高部宗教委員会)



## &lt;留学報告&gt;

## An Eventful Year at BGSU

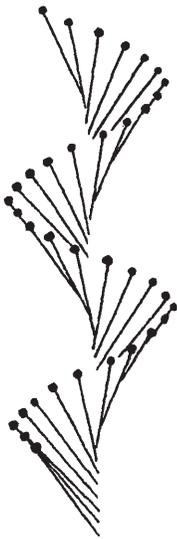
Kurtis McDONALD

From August 2019 until July 2020, I had the wonderful privilege of being invited as a Visiting Research Scholar with the Department of World Languages and Cultures at Bowling Green State University (BGSU) in Bowling Green, Ohio, U.S.A. by Akiko Kawano Jones, Teaching Professor, former Director of the Asian Studies Program in the College of Arts & Sciences, and noted alumna of Kobe College.

During my time at BGSU, I dedicated myself to three main activities: continuing my research on the development of second language learners' interactive speaking abilities over time, more closely examining the challenges faced by international students in the U.S., and working to deepen and enhance the relationship between Kobe College and BGSU. While all three of these pursuits proved extremely rewarding both professionally and academically, it was perhaps the dedication and enthusiasm that I witnessed firsthand in Jones-sensei's tireless efforts in spurring her students' interest in both Japanese language and culture beyond the classroom that I found most personally inspiring.

I am extremely thankful to both Kobe College and Bowling Green State University for allowing me this unique opportunity and I look forward to continuing to further the relationship between our two schools going forward.

(共通英語教育研究センター准教授)



史料室の窓(52)

## 女学院生は演劇がお好き

神戸女学院史料室 佐伯 裕加恵

神戸女学院は2020年、創立145周年を迎えました。この長い歴史の中でずっと変わらず保ち続けてきたのが教育方針の柱であるリベラルアーツ教育です。これは、ここで学ぶ学生生徒の自主性を育む教育です。ですから神戸女学院における自主活動の歴史は古く、学院に自治会ができたのは今から113年前の1907年1月のことです。全員参加の自治会は「高尚な校風を維持し、自治の精神を養い、愛校心を増すために会員をして個人的に、また団体的に責任を發揮せしむ」という目的で活動し、皆この活動に非常に熱心に取り組んでいました。運動会や感謝祭、クリスマス祝会等の行事も主催し、中には熱心になるあまり学業に支障をきたす人が出たほどだったとか。

ところで、神戸女学院には自治会よりさらに歴史のある学生生徒の団体がありました。1888年にできた最古の文化的団体、その名は「英文学会」。のちに結成された「和文学会」と合併して1892年から「文学会」となり、月一回例会を開いて経験を積み、その成果を年一回の大文学会で披露していました。

明治年間には英和両文の朗読・暗誦・対話を主とし、これに理科に関する研究発表一番を加えた程度のものでしたが、大正時代に入ると、1916年5、6月の文学会例会で演じられた史劇「春日局」、英対話劇「ペルセフォネ」の舞踊が満堂の讃嘆を集め、以来、演劇が次第に華やかになっていきます。殊に10月16日、創立40周年を記念して開催されたものは2部構成でそれぞれに約1時間の演劇が組み込まれていました。また、7月に開催された記念文学会では「神戸女学院の起源」(歴史劇)と「神戸女学院だまし」(寓話劇)が演じられています。1917年5月22日の記念文学会ではデフォレスト院長(Miss Charlotte Burgis DeForest)脚色の創立者タルカット女史(Miss Eliza Talcott)の一代記11場が上演され、演劇に関する興味がますますそそられました。

そんな中で自ら創作した作品を上演する学生も現れます。当時の文学会会長曰く、「學校と云ふ者の中にはぐくまれる文學會の歩みは、いつも無難で同じ行き方をつづけて居ります。もう少し新しい変わった道を歩むのが本当か、四季の様に同じ事を繰り返して然も其折々に、人に目新しく、何者かを暗示してゆくのが本当か。[略]私共の成長は、ぐんぐんと力強く進められつゝあり



マクベス上演 (1925年)

ます。物の芽の様に、土から頭を擡げた若き、恐れざる劇作家をも、はぐくむであげたいと思ひます。其意味で、今期第一の小文學會には、五年生の大野氏創作戯曲を其儘、氏を監督として演ずる筈で御座います。[略](1921年8月2日発行『めぐみ』第1号 pp. 24-25)

創立50周年(1925年)には、学院を宣伝する目的をもって、「学院の得意とする音楽と英劇のプログラム」を作り、岡山・名古屋・京都・大阪で外部公演をおこない、大学部2年生は「マクベス」を演じ、各地で好評を博したとのことでした。

昭和に入ると、新歌舞伎や新劇、シェイクスピア物が多くなり、日本劇の衣装、かつら、小道具などは宝塚歌劇団などから借用したそうです。

大文芸会(1930年改称)は、戦前は1940年10月まで続けられ、戦後も1946年にいち早く復活を遂げ、1950年10月9日、創立75周年記念にも演劇がおこなわれました。その後、1960年、創立85周年の時には、中学部・高等部・大学の各自治会が一緒になって記念祭実行委員会を作り、大阪のフェスティバルホールで能・演劇・コーラスなどを上演し、3時間半にわたる催しを成功させました。

先にご紹介した文学会会長の言葉にこうあります。「時々先輩の思想を窺って、真に良き方面に、めざめてゆきたいと思って居ります。」と。

今回、演劇を一例に取り上げてみました。現在、全学あげての「文芸会」はありません。しかし、その長い自主活動の伝統は大学祭、文化祭に受け継がれて、神戸女学院の中に息づいています。

## 大学報告

### 「新入生の会」開催報告

新型コロナウイルス感染拡大に伴い4月に予定していた入学式が中止になり、満開の桜のキャンパスに新入生の皆さんを迎えることが叶いませんでした。さらに通常より1ヶ月遅れてはじまった前期講義は遠隔授業になりました。キャンパスでの学びを全く経験していない新入生の胸中を察するに余りあるものがあり、一日でも早く皆さんと直接お目にかかり歓迎の意を伝えたいという気持ちを持ち続けながら前期を過ごしました。

残念ながら感染拡大は収まらず、後期も遠隔授業が大部分になることを決定しましたが、後期開始前には「入学式に代わる行事」をおこなうことを願い、その実現に至った次第です。

会場の講堂入り口で検温実施し、三密を避けることから9月23日(水)は①音楽学科、環境・バイオサイエンス学科 ②心理・行動科学科、24日(木)は①英文学科、②③総合文化学科は2グループに分けて、計5回の開催となりました。

会次第は聖書朗読、祈祷、斉藤学長の言葉、飯院長の言葉、音楽学部生による歓迎の演奏など例年の入学式を踏襲しました。ただし讚美歌斉唱はおこなわずオルガンに耳を傾けながら歌詞を目で追うことにし、記念歌「Beauty Becomes a College」は斉藤学長に独唱をお願いしました。

限られた時間でありましたが新入生をお迎えできたことを喜び、皆さんの学びの日々が守られるよう、祈りを合わせました。学生生活支援センターをはじめ多くの方々のご協力に御礼申し上げます。

(学生部長 中野 敬一)



斉藤学長より歓迎の言葉

### コロナ禍での学びを継続させるための取り組み

#### 【英文学科】

2019年度後期開始時期ラジオで AI によって消える仕事と創出される仕事の特集をしていました。2020年の時点で AI によって消える仕事が180万件、創出される仕事が230万件あるそうです。就職に向け学生がよりよく準備するための学科としての対応策が頭をよぎりましたが、当時はその後コロナ禍で学生の IT スキルや遠隔授業への準備をしなければならぬ将来が待ち受けているとは、夢にも思っていませんでした。

英文学科では教員と学生双方の立場に立って遠隔授業の準備をはじめ、日英2カ国語の書類を作り、学生の混乱を防ぐため、遠隔授業に使用するソフトウェアを学科内で統一させることとし、非常勤を含む全教員に周知しました。学生への対応は3月から開始しました。特に履修登録の経験がない新入生のために、学生主事からの大学生活、IT オリエンテーション、ウェブサイト確認方法についての動画、学科長、教務委員からの英文学科での学び、履修登録についての動画を作成し、4月6日(月)英文学科ウェブサイトにて配信しました。また、キャンパスで会えない新入生のために、金曜日昼休みに10週間 Zoom ランチを実施しました。毎回違ったテーマで教員や上級生も参加し、最後に学生だけで話す時間をとりました。7月には英文学科教員を紹介する紙飛行機プロジェクトという動画も作成、これは卒業生からも反響がありました。さらに、今年リニューアルした教員手作りの My Portfolio の書き方も動画で配信し、9月の新入生の会で My Portfolio を集め、後期のアカデミック・アドバイザー面談につなげました。

手探りの数ヶ月でしたが、教務委員、学生主事、メディア担当教員をはじめ教員と事務職員が春休み中から協力して取り組んだおかげで、英文学科のウェブサイトや YouTube 動画も充実させることができました。そして遠隔授業を受ける上級生がさまざまな制約のある状況に屈することなく、巧みに遠隔授業ツールを操作しプレゼンをする様子を見て、これからのリモートによる就活も準備万端である、と大変喜ばしく思いました。

(英文学科長 松尾 歩)

### 【総合文化学科】

私の担当科目では、Zoom を使用してライブ型・双方向型の授業形態をとりました。講義科目（学生80名程度）で気をつけた点は、① PowerPoint のスライド資料をできるだけ多く（従来は口頭で説明していた部分も一部書き起こして）、事前に Moodle 上にアップしておくこと、②授業参加状況を確認するための小テストを毎回実施し、授業終了後には音声データを Moodle 上にアップしておくこと、③課題の提出期間に余裕をもたせること（2週間程度）です。このうち②の授業音声データは、授業の復習のために学生が積極的に活用しており、従来にはなかった学び方がみられました。

ゼミ（学生12～20名程度）は少人数制のため、別の点にも気をつけました。第一に、多様なネット利用環境への配慮です。たとえば、兄弟姉妹と一緒に暮らしている学生の場合、声を出すと家族に迷惑がかかるので、その学生とはチャット機能でやり取りをしました。第二に、オンラインに特有なコミュニケーションに不慣れという問題です。ゼミでは学生同士の話し合いの時間が多いのですが、意見を述べたい時は画面上で何らかの合図をするように伝えました。ゼミでは皆がオンライン・コミュニケーションの初心者であり、自分にあった方法を見つけようと呼びかけました。まだ教員もオンライン授業の手法に慣れておらず、この先も学びを継続させるために試行錯誤を続けたいと思います。

（総合文化学科教授 北川 将之）

### 【音楽学科】

全世界がこれまでに経験したことのない新型コロナウイルスの脅威に直面したこの春、音楽学部の学びも全面オンライン授業となり、教職員も学生も新しい授業形態に悪戦苦闘しながら取り組んでまいりました。時間芸術である音楽を採求する私たちにとってそれはとても厳しい現実で、CD や録画技術がいかに発達した現代でも、その瞬間、その場でしか味わえない空気感や臨場感を得られないもどかしさを強く感じる日々でした。

前期実技レッスンは Zoom や FaceTime 等を使用して遠隔で進められました。遠隔レッスンにはメリットとデメリットがありました。まず、困ったこととしては、WiFi 環境が様々でうまく繋がらない時や中断することが多々あったことです。また接続状況が悪くなると演奏が急に遅くなり、突然数小節飛んでしまうこともあり、音楽の流れや構成を正確に判断するのは困難でした。音色の変化や強弱の判断も難しい面がありました。そのため多くの教員が事前に YouTube 等の録画を送ってもらってチェックしておき、Zoom でそれに基づいてアドバイスを伝えると言う方法を取っていました。良かった点は、録画することによって学生が自分の演奏や姿勢をチェックし考える機会となったことです。

6月中頃よりは感染拡大状況を慎重に見ながら上級学年より徐々に対面レッスンが再開しました。登校学生の事前許可申請、健康チェック、消毒、飛沫防止パネル、マスクなど万全の感染予防対策を取っての実施でした。数ヶ月ぶりの対面レッスンでは予想外の喜びと驚きがありました。学生から発信される生の音の美しさ！そして遠隔で何回も話し合ったことが、対面ではほんの一瞬で伝えられることの驚きでした。

コロナ禍という厳しい事態に直面して、私たちは生でしか伝えられないものの素晴らしさ、同じ空気の中でコミュニケーションできる喜びを再認識いたしました。with コロナの時代の中で、音楽の素晴らしさを伝え、充実した学びが得られるよう、これからも努力してまいりたいと思います。

（音楽学科長 佐々 由佳里）



2020年度教授会研修会報告資料から抜粋

**【心理・行動科学科】**

Ps583-1a 臨床心理面接特論 I a (心理支援に関する理論と実践)は、大学院の公認心理師と臨床心理士の養成カリキュラムの必修科目である。心理支援の代表的な技法の理論と実践を学ぶことを目的とし、また後期から始まる大学院附属の心理相談室での事例担当実習の準備をおこなう。今期は Moodle と Zoom を駆使し、まず理論については録音したパワーポイント資料をオンデマンドで提示しレポートを提出させた他、内容に応じて Zoom でディスカッションをおこなうこともあった。本授業の中核的内容である面接のロールプレイについては、従来は心理相談室にて対面でおこなっていたものを今期は苦肉の策として Zoom で実施したが、やはりリアリティも教育効果も不十分だったことは否めず、改めて対面面接の治療的意義を確認することとなった。ただ Moodle を活用してロールプレイ資料の提示、コメント、リコメントといった流れを共有し、準備を十分にしたのちに事例検討に取り組めたことは収穫だったと言える。

(心理・行動科学科准教授 鶴田 英也)

「心理学実験 (Ps216a)」では、実践的に心理学の研究方法を学びます。例年の対面授業では、実験者と実験参加者の役割を両方体験し、収集したデータを分析して結果をレポートにまとめるという作業を4つの研究テーマで繰り返します。今年度の遠隔授業では、受講生に実験者と参加者の役割を経験してもらうことが困難でしたが、例年は紙の刺激を用いていた実験を、PC画面上で刺激提示する実験に変更するなど、参加者側の体験ができるよう工夫しました。刺激作成やデータ収集の際の実験者側の苦労を実際に経験できなかったことは残念ですが、過去のデータを用いて科学的な論文を「書く」ことに重点を置きました。不開講という選択肢もありましたが、本科目は、より良い卒業研究を遂行できるようにするための訓練の場であるため、論文執筆の練習だけでもしてもらいたいという思いで開講に踏み切りました。授業準備において、とりわけ非常勤の先生方には多大な苦労をおかけしましたが、学びの機会を一つ減らさずに済みました。ここに感謝の意を表します。

(心理・行動科学科准教授 矢野 円郁)

**【環境・バイオサイエンス学科】**

まず新入生にはアカデミックアドバイザー (以下 AA) にメールを送信してもらい、メール交換、Moodle の AA グループで対話、Zoom で歓迎会と繋がりを大切にして、遠隔授業のフォロー体制をつくりました。

実験実習による体験学習を重視している本学科では断腸の思いで前期は全て遠隔で授業をスタートしました。一部の実験実習科目 (前期2、後期1) は開講中止にせざるを得ませんでした。1年生必修で前半後半の2グループに分けて前期と後期の入替制履修としている2つの実習科目は公平性を期すため、バイオサイエンス基礎実習は前後期ともに遠隔とし、環境科学基礎実習は前期分を後期に開講し、対面実習を土曜日におこなっています。講義科目は前後期を通して完全に遠隔授業としましたが、4年生の卒業研究の遂行に不可欠な実験のための登校や学外調査活動が6月に許可され、対面授業を一部再開し、後期は3年生の演習 I や一部の実験実習科目も対面でおこなわれています。(約45%)

対面授業をおこなう場合は、密を避けるために通常の時間割コマ以外にも分散する、必要最小限の実験のみを対面でおこなう、フェイスシールドの着用やアルコール消毒等、感染防止対策に万全を期しています。

遠隔授業の手法としては、リアルタイム型では Zoom を使って参加型の対面授業に近づけ、オンデマンド型では Moodle を使って、教材を配信し、小テストを作成して理解度を確認、課題機能を使ってレポート提出、課題のコメント機能を用いてフィードバック、Q&A 等のフォーラムでディスカッションなど、対面できない分、繋がりを大切にする工夫もしています。さらに、実験実習ができない部分を補うために、実習者視線で撮影した実験動画や野外調査ビデオ、Zoom の録画機能を使った授業動画、ナレーション入りのパワーポイント動画等々を多数作成し努力しています。

(環境・バイオサイエンス学科長 出口 弘)

## 今年度の入試広報活動について

コロナ禍の中で始まった今年度の入試広報活動はあらゆる面で縮小を余儀なくされました。まず、3月を皮切りに6、7、8月に予定していたオープンキャンパスは来場型での実施を取りやめ、急遽WEBでの実施に切り替えることになりました。また8月後半にオープンキャンパスを2回追加実施することとし、これ以降は9月を含めて来場型にて実施できるようになりました。とはいえ、感染防止を最優先に、完全事前予約、人数制限でおこなったため、例年と比べると受け入れ人数が少なくなり、来場を希望してくださった高校生の方々には大変ご不便をおかけすることになりました。他にも、学外での進学相談会等、外部業者が実施するイベントは8月ごろまではほぼ中止となったほか、職員による高校への訪問活動も出張の制限や訪問体制の縮小等の理由で例年と比較すると半数ほどに留まりました。

これまでとは全く様相を異にする環境下におかれ、自前での動画制作、遠隔での個別相談や説明会の実施等、新しいツールを使っでの広報活動に必死にあたってきた半年間だったと言えます。一方でこれを契機に入試広報活動も大きな転換点を迎え、今後はそれらのツールをどう活用していくのが課題となっています。

最後になりますが今年度入試広報活動に協力していただいた教職員の方々、特に動画の編集をすべて手掛けてくださった視聴覚センターにこの場を借りて心より御礼を申し上げます。

(入学センター課長)



9月に実施したオープンキャンパスの様子

## 「メイド・イン・バングラデシュ」を考える

英文学科では、2020年3月に開催された第15回大阪アジア映画祭に協賛し、映画祭上映作品「メイド・イン・バングラデシュ」(ルバイヤット・ホセイ監督、2019年)に学生たち30名とともに日本語字幕を作成、また同映画祭との共催にて公開シンポジウム『「メイド・イン・バングラデシュ」を考える』を開催しました。この映画では、世界のアパレル生産を担うバングラデシュの労働者の置かれている状況、苦境のなかで労働者の権利を求めて立ち上がる女性たちの姿が描かれています。シンポジウムには、主人公のモデルとなった実在の女性(ダリヤ・アクター・ドリさん)にお越しいただき、本学教員南出との対談を通じて、バングラデシュの労働者の実情や映画制作の背景についてお話いただきました。シンポジウムの後半では、2月23日(日)～3月3日(火)に学科目フィールド・スタディ(Fashion Field Study in Bangladesh)でバングラデシュを訪れた本学科学生8人による現地報告もおこないました。

学生たちは、映画字幕制作やシンポジウム、また現地フィールド・スタディを通じて、私たちが日々着用している「メイド・イン・バングラデシュ」(バングラデシュ製)の衣服の背景を痛感し、グローバル社会を生きる私たちの問題を考える機会となりました。

(英文学科准教授 南出 和余)



バングラデシュと出会う学生たち

## &lt;留学報告&gt;

タイキリスト教大学

## 自分の感覚に素直になって

文学部 英文学科 4年生

大学で見つけた一つの掲示板を見たことが全てのはじまりでした。その掲示板に書かれていた「タイ王国」の文字に惹かれ、心が躍るのを感じた私は興奮気味に母に電話を掛け、留学に行くことを伝え、そのまま流れるように教務課に足を運びました。留学に行くつもりは全くなかったはずなのに、事は自然と軌道に乗り、数ヶ月後にはタイにいました。今思えばこの時から自分の感覚を大切に動きはじめたのです。あの時の私に恐れるものなど何もなく、未知の世界に胸を膨らませていました。なぜタイなのかとよく尋ねられるのですが、1番の理由に、ただタイで生きてみたかったと答えています。観光地の印象が強いタイで、現地の人々のリアルな生活、またその裏にはどんな社会問題があるのか、それらを住んで体感してみたかった。私が実際に感じたタイは（地域格差はあれど）長い間、発展途上国と位置付けられてきた国の姿ではありませんでした。街は発展を終えて、熱い志を持った若者で溢れていました。しかしその裏で環境問題や社会問題は二の次となり、発展することに精一杯で、まるで日本の高度経済成長期であるかのようでした。タイの現実を目の当たりにして以来環境問題に取り組むようになったり、足を運んで人に逢いに行ったり、これまでの自分の殻を破り続けることができました。常に自分の感情に耳を傾けて動いたから今の自分があると思うと、自分の感覚は全てを知っていると気付くことができました。



片道10パーツで街に出る

ロックフォード大学

## Journey of Self-discovery

文学部 英文学科 3年生

アメリカのロックフォード大学へ9か月間、派遣留学をさせていただきました。海外経験がない上に留学先で唯一の日本人であった私にとって、この9か月間は新たな挑戦や発見の連続でした。中でも、自信を持つ大切さを強く実感しました。私は、初日から積極的に周囲と関わることを心掛けましたが、留学初期にはまだ自信を持っていませんでした。しかしある日、友人らとお互いについて話していた時、彼らから、私が笑顔でフレンドリーであり、全体を見て行動ができ、何でも話せる存在であることなど様々な言葉をかけてもらいました。それにより、私の人間性が多くの友人を惹きつけたことに気がきました。また、“You are special.”と言われた時、私は私、周囲と比較する必要はないと思えました。これを機に、10月頃から自分を信じて、より活発にイベントに参加し、時には企画に携わり、また新しい外国人留学生のサポート側に回るまでに成長しました。毎日が楽しく、アメリカ他15カ国以上の多様性溢れる友人らと交流を深めるうちに、いきいきと輝く本当の自分を発見したように思います。学習面においては、大量の予習復習や課題に苦戦しながらも授業で積極的に発言や質問をし、最後まで諦めず駆抜けました。活発な行動の原動力となる自信を与えてくれた友人らの存在は大きかったです。私の留学生生活を支えてくださった全ての方々への感謝を忘れず、得たものを今後様々な形で生かしたいと思えます。



留学生の仲間とともに

ボーリンググリーン州立大学

## 留学をして成長できたこと

文学部 英文学科 3年生

2019年の夏から約1年間、アメリカ、オハイオ州にあるボーリンググリーン州立大学に派遣留学させていただきました。留学先では主に演劇を学んできました。私は演劇、特にミュージカルが大好きで、卒業論文もミュージカルの脚本翻訳をするほどです。アメリカに留学したら日本ではあまり学べない演劇の授業を取りたいと思っていたので、できる限り多くの演劇の勉強をしてきました。

ところが、3月、新型コロナウイルスの影響で帰国が突然2カ月早まり、多くの楽しみにしていたことができなくなってしまいました。突然、当たり前が当たり前でなくなって、悔しさ、悲しさ、やりきれなさ、様々な思いがこみ上げてきましたが、後悔は全くしませんでした。それは今回やりたいことは全て勇気を出してやってきたと言えるからです。人見知りで度胸がなく内気な私は、新しい環境に飛び込んで挑戦することが苦手です。しかし、留学というまたとない機会を与えていただいたこと、また、1年という限られた時間であったこともあり、勇気を出して演劇の授業をたくさん取ったり、先生方に相談や質問をしにいったりしました。その結果、想像以上の素敵な機会に恵まれ、充実した演劇づけの留学生活が送れました。中高時代から度々耳にしてきた「チャンスはたくさん転がっている。でもそれを逃すも生かすも自分次第。」という言葉を改めて実感しました。この留学で得たものを糧にこれからも励んでまいります。



友人たちと図書館の前で

イーストアングリア大学

## 留学での学び

文学部 英文学科 3年生

私は、2019年9月からイーストアングリア大学へ留学させていただいておりました。高校での留学を経験した際に、大学入学後は学部留学をし、現地の学生と同じレベルで学びたいという思いが強かったため、入学後より、日々の小テスト、課題などに必死に取り組みました。本当に選ばれるのか不安に思う時期もありましたが、絶対に行きたいという強い意志があり、諦めなかったからこそ、派遣留学に行けることができたのだと、今振り返るとそう思います。

留学に行けることが決まった時はとても嬉しく、わくわくしておりましたが、日が経つにつれ、私は具体的にどの様な目標、目的を持って留学に行くのだろうかと思いはじめるようになりました。学部留学をしたいと言っても、具体的に私はどのようなことを学びに行きたいのか。結局そのモヤモヤした気持ちを抱えたまま、私は日本を後にすることとなりましたが、飛行機トラブルに遭い、そんなことを考える暇もないまま私の留学生活はスタートしました。日本では深く学ぶことのできない分野の学び、多種多様な文化を持つ学生との意見交流などをおこなうことにより、日本とは違った視点での物の見方、考え方に気付きはじめ、その違いを理解、説明し合うことの面白さを感じはじめました。具体的な目標が定まっていなくても、留学先で暮らし、様々なことを経験することにより自然と視野も広がり、自分を成長させることができたのではないかなと考えます。

## 揚州大学

## 中国での学び

文学部 総合文化学科 4年生

私は2019年の9月から2020年の1月まで中国の揚州大学へ派遣留学をしました。本来なら約10ヶ月間の予定でしたが、新型コロナウイルスの影響により、中断せざるを得なくなりました。

私が留学を決めたきっかけは、1年生の時に本学の留学生バディ制度を通して中国人留学生と交流したことです。それから中国に興味を持ちはじめ、中国語を真剣に学びたいと思うようになりました。

30人以上の様々な国籍のクラスメイトらと共に授業を受け、中国語や中国文化だけでなく、他国の文化や価値観に触れました。

そして大学で開催するイベントにもたくさん参加し、日本人留学生6人でダンスを披露したことが非常に印象に残っています。

この留学を通して、自身の語学力の向上だけではなく、多角的に物事を見ることができるようになりました。4ヶ月という短い留学期間でしたが、日本には感じる事ができなかった中国での生活を体験でき、実際に中国人と交流してその人柄の良さを感じ、有意義な時間を過ごせました。たくさん失敗もしましたが、自分を鼓舞し、最後まで勉学に励むことができました。自分自身の成長を感じる部分も多く、学生時代に留学を経験することができて本当に良かったと感じています。今後は、中国留学での学びをこれからの人生に活かしていければ、と思っています。

このような機会をいただけたことに感謝しています。ありがとうございました。



大学で開催された新年パーティー

## 広東外語外貿大学

## 私の留学生活

文学部 総合文化学科 4年生

11ヶ月間中国留学を経験させていただきました。この留学生活で語学力向上だけでなく、人間的に成長して帰ってくることができました。現地では意外にもたくさんの中国人学生や留学生と交流できました。限られた留学期間の中で、最大限に自身の力を伸ばすため、日常の勉強に加えて部活動や行事に積極的に参加しました。そこでできた友人から交流の輪が広がり、あっという間にたくさんの友人ができました。彼らと交流する中で自分が中国語を発信する機会が増え、語学力の向上に繋がりました。勇気を持って挑戦する行動力が身についたと思います。また、広東外語外貿大学は学生の語学レベルが高いので、みんなに刺激を貰いながら、私ももっと上を目指そうと向上心が高まりました。そして、私を派遣留学生に選んでくださった神戸女学院大学の先生方や、中国や日本から応援してくれている方へ常に感謝の気持ちを持ち、期待に応えられるよう毎日勉強に励みました。決して私1人ではやりきれなかった留学生活も、周りの支えがあったからこそ成し遂げられたと思います。楽しいことばかりではなく、困難や悩みもありましたが、目標を持って前向きに進んでいくことができました。帰国後も友人と連絡を取り合ったり、勉強を教えあったりしています。これからも良い関係が続いていけば良いなと思います。この留学生活は一生忘れられない大切な経験であり、人生の糧となりました。ありがとうございました。



明るく元気いっぱいのクラス

## 音楽学部夏期講習会報告

2020年度音楽学部夏期講習会は、8月8日(土)～10日(月)の3日間、実技レッスンを中心に開催された。当初は7月29日(水)～8月1日(土)の4日間、対面で実施予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大のため、一旦は8月1日(土)、2日(日)のオンラインレッスンでの開催に変更した。最終的には上記日程で対面レッスンでの実施となった。

講習会には合計92名（[音楽] 80名、[舞踊] 12名）の受講生が参集し、短い時間ではあるが音楽学科の授業体験や雰囲気を感じ取っていただく良い機会になったことと思う。



講習会のスケジュールは、感染防止対策を徹底した上で例年実施していた聴音のテストや楽典の授業はおこなわず、受講生の学習用にワークブックの配布や入試を疑似体験できる動画配信を実施し、各専攻教員による個人実技レッスンにおいては、すべて1回のみ（30分間）とするなど密を防ぎ全体の進行の簡素化を図った。



また舞踊専攻は教員陣による実技レッスン指導、島崎 徹先生のアドバイスタイムや動画の鑑賞がおこなわれた。

(音楽学部事務長)

## 夏期インターンシップ実施報告

本学では、毎年、多くの企業や自治体・団体のご協力を得て、「学内募集インターンシップ」という形で学生に就業体験をおこなう機会を提供しています。参加時期は、夏休み期間中が主となります。

今年は新型コロナウイルスが猛威を振るうなか、学内にて参加者募集をおこなうべきか否か、非常に頭を悩ませました。インターンシップは、実際の仕事や職場の状況を知り、職業選択について深く考える契機となりますが、近年では、参加者が本選考において初期選考を免除されるなど、優遇措置を受けるケースが増加しているためです。2022年卒採用が厳しくなることが予想されるなか、「学内募集インターンシップ」の門戸を完全に閉ざしてしまうことには、やはり戸惑いがありました。

幸い、その後、新型コロナウイルスの感染者数は減少傾向となり、緊急事態宣言も解除される見通しとなったため、例年より1か月ほど遅れて参加者の募集を開始することになりました。ただし、今年は受入れを見送るという判断をされた企業が多く、また、募集をおこなっても、感染への警戒心からか、応募がないというケースもあったため、その規模は例年と比べ大きく縮小することとなりました。

今夏のインターンシップでは、以下の企業、自治体・団体の皆様のお世話になりました。記して、心より感謝の意を表します（かっこ内は受け入れてくださった本学学生数）。

尼崎信用金庫（2名）、関西環境管理技術センター（2名）、名鉄観光サービス（2名）、芦屋市（1名）、丹波市（1名）、ひょうご環境創造協会（1名）。

余談になりますが、キャリアセンターでは今年から、インターンシップ参加決定者に対して、メール報告を義務づける形でインターンシップの参加状況を調査しています。そこからは、ナビサイトなどから学生が自ら応募する「公募型インターンシップ」においても、（密を避けるための）募集枠縮小や、（就業体験をおこなうことが難しい）WEBインターンシップの登場、（対策を講じにくい）抽選による実施の増加など、新型コロナの爪痕がいくつか見取れます。本来、多くの学生の受け皿となるはずの「公募型インターンシップ」が大きく縮小したことを考えると、少人数であっても、感染者を出すことなく無事に「学内募集インターンシップ」による派遣をおこなえたことの意義はあったと考えます。

(キャリアセンター)

## <インターンシップ参加報告>

### インターンシップ参加報告

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生

8月下旬、私は名鉄観光サービス株式会社にて、3日間のインターンシップに参加しました。実習内容としては行程表の作成、旅費の見積もりなど、実務の一端を経験させていただきました。この経験から、当事者意識を持ち自ら行動する重要性を学びました。

参加時期は感染症の流行により、業界全体が打撃を受けていました。このような状況下でも、社員の方々が「状況の改善をただ待つのではなく、行動により変える」という姿勢を大切にされていたことから、自ら働きかける行動力が社会で求められると実感しました。

また感染症による情勢に鑑み、海外研修に代わる国内施設を探る必要がありました。この業務を手伝わせていただく中で「国内でも充実した研修をお届けしたい」「同世代として私が案を出すことで何か貢献できるのではないか」という想いが芽生えました。そこで、自主的に宿泊施設や語学プログラムなどの調査をおこない、担当の方へ提案をおこないました。このように何事にも関心を持ち、徹底的に調べることが私の強みであると自負しています。この強みを実務で活かし、社会に貢献できると身をもって知れたことは、私にとって大きな財産になりました。

インターンシップに参加することで文面では知り得ない情報を肌で感じることができ、大変貴重な経験でした。この経験から得た学びと自信をもって就職活動に臨み、人生の目標を達成できるよう、今後も精進してまいります。

## 大学教授会研修会報告

今年度の教授会研修会は、「2020年度前期授業遠隔化を振り返る」と題し、3月以降の大学の危機対応と教育の取組を共有しました。大学SD・FD活動の中核をなす行事として、例年は授業のない一日をかけ膝をつき合わせての議論をおこなってきた教授会研修会ですが、今回初めてのオンライン開催となり、9月22日(火)～24日(木)オンデマンドで配信しました。

研修会は学長挨拶、礼拝につづく7本の報告動画で構成されました。副学長・教務部長からは、大学執行部の意志決定や教務・学生支援をはじめとした諸対応など、半年間の流れを概観していただきました。情報処理センターディレクターからは授業遠隔化の基盤であるIT環境・教育の状況をお話いただき、FDセンターディレクターからは学生・教職員アンケート結果をもとに、遠隔授業の効果と課題を報告しました。さらに授業実践報告として、英文学科、総合文化学科、心理・行動科学科、体育研究室の各先生方が、それぞれの遠隔授業の方法や工夫をお話してくださいました。

研修会への参加は、学習支援システム上に掲載された各報告、計3時間を視聴してコメントを投稿する、というかたちでおこなわれ、オンライン上とはいえ活発な質疑や情報交換がなされました。これは、学生がオンデマンド授業を受講するのと同じスタイルであり、大学生の日常の疑似体験ともなったようです。コンテンツのうちアンケート報告と各授業実践報告については、研修会後に非常勤講師の先生方向けにも公開し、授業改善に役立てていただきました。

2020年度前期の経験は危機であると同時に、多くの新しい気づきや学びを与えてくれてもいます。私たちは今後も新型コロナウイルス感染症の影響下での教育の模索を続けなくてはなりません、さらにその先の大学教育の新たな方向づけを展望するうえでも、有意義な研修の機会となりました。

参加人数(コメント投稿者数)は大学教員63名、職員8名でした。お忙しいなか会の準備にご尽力くださったみなさまにお礼申し上げます。

(FDセンターディレクター 孟 真理)

## 中高部報告

## 第48回高校生英語弁論大会報告

高等学部 2年生

私は2020年の1月25日(土)に開催された第48回高校生英語弁論大会に出場しました。この大会では、自分が最も伝えたいテーマを5分のスピーチにまとめて発表します。私は「笑い」について発表しました。「笑い」はストレスを発散するだけでなく、免疫力を高めがん細胞を死滅させることも可能で、心身両面への働きから、私たちの生活を豊かにするには必要不可欠なものであるという内容でした。発表の順番はくじ引きで、まさかの一番でしたが、自分のパフォーマンスを最大限に発揮することができました。スピーチ終了後、審査員代表の先生が私の元に来てくださって、「あなたのスピーチで僕は生きる希望を持ってました。もっと笑うように努力してみるね。本当にありがとう。」とコメントをいただきました。その先生は現在皮膚がんを患っており治療中だそうです。私の伝えたかった「笑い」の大切さがしっかりと心に届いたことが本当に嬉しかったです。結果として「豊中・サンマテオ姉妹都市協会会長賞」をいただくことができました。今年の夏に、豊中市の代表の親善大使として姉妹都市のサンマテオ市に2週間派遣される予定だったのですが、新型コロナウイルス感染拡大のため延期となってしまいました。私は、世界全体がコロナ禍に侵されている、今、この時こそ「笑い」が世界中の人々に大切だと思います。

最後にご指導いただきました先生方に感謝の意を伝えたいと思います。

## EGMO 日本代表に選ばれて

高等学部 3年生

4つの問題に4時間かけて向き合う。どの問題も題意の条件はとてもシンプルで結論は驚くほど簡潔。しかし、そこへ向かう道筋を見つけるために何枚もの計算用紙に図を、式を、使えそうな定理を書き散らしてひたすらに、もがく。

ヨーロッパ女子数学オリンピック日本代表を決める大会で、4時間泥臭く紙の上でペンを走らせ、もがき続けた結果、私は日本代表になりました。

問題を開けるまでは、日本代表になりたいとか、オランダに行って楽しみたいとか色々な邪念も頭を巡っていましたが、問1の文章を読み終わった時にはそんな思いは消し飛んでいました。別のことを考える余裕を与えてくれないくらいに、一問一問が重かったのです。この問題の解法が見えたら、どんなに気持ちいいだろうかと心底ワクワクしました。計算用紙を真っ黒にして足掻き続けて、なんとか見えた答え。それを、涼しい顔で「ええ、私にはこの問題余裕でしたよ」とでもいうように丁寧な字で解答用紙に清書して、「以上より題意は示せた。」と書いた時、最高に気分が良かったのです。日本代表に選ばれた時、数学オリンピックの問題でしか味わえないあの興奮を予感して、体が震えました。新型コロナウイルスによる大会の中止はあまりに残念でしたが、選考試験やオリンピック協会が日本代表選手に用意してくださった通信添削指導を通じて素敵な数学体験ができて、本当に良かったです。

## 習慣づくりの先に得たもの

高等学部 3年生

私はこの度、第36回成田山全国競書大会にて仮名作品を出品し、成田山賞をいただきました。この作品を書きはじめたのは、学業にも本格的に打ち込み始めた高2の11月のことで、一度に沢山書く時間をとるのは体力的に難しいと感じていました。そこで私は短時間でもいいので部活の有無に関係なく、間が空かないように定期的に筆を持つようにしました。そうすると、前回の練習の記憶が鮮明なうちに書くことで、心を落ち着けて集中して取り組む習慣が自然とついていました。今回の作品は一枚完成させるのに最低でも30分はかかります。あともう少しで書き終わるという所で作品全体のことを意識する集中力が途絶えてしまいやすいですが、そこで失敗してしまうと、それまで書いた時間や労力はふいとなってしまう。今回の習慣づくりはこのような事態を防ぐことに繋がりました。また、一回に取れる時間が限られていたことは私に緊張感を与えてくれて心も体も書道に全集中する力を鍛えられました。毎回、いただいたお手本に近づけるように全力を注いでいますが常に新しい発見があります。でも「自分」の作品は、お手本の良いところを吸収した上で、自然と自分らしさを出せるようになるまで書き続けてやっと完成するのだと思います。自分でも満足のいく線を書いたり作品全体の雰囲気を出せるようになると、さらに書道をするのが楽しくなります。今回は、今までの中で一番その段階に到達できたのではないかと感じています。

この大会の後も次の大会に向けて練習していましたが今年はコロナの影響で中止となり、これが私にとって高校生活最後に応募した展覧会となりました。またコロナの影響で成田山で自分の作品を飾っていただいていた期間に直接見に行けなかったのですが、出品したものと同じ作品を大切な友人が貰ってくれてお家に飾っていただいている、大変嬉しく思っております。卒業後も引き続き書道に励み続けたいです。

## 日本生徒会大賞2020奨励賞

高等学部 3年生

受賞理由である第8回全国高校生徒会大会実行委員長としての活動について、寄稿させていただきます。

全国高校生徒会大会とは、全国の生徒会役員が交流を通じ、役員としての意識や活動について共有したり、問題解決の方法を学校という枠を超えて一緒に考えたりする活動です。2013年の第1回開催以降、延べ920名以上が参加してきました。

私は、実行委員長として全国大会開催に向け約一年かけて準備を進めていました。二泊三日にわたる大会の企画や実行計画はもちろんのこと、協賛企業の募集等、高校生のみで構成される実行委員会ならではの苦難もたくさんありましたが、当日の参加者の方々の笑顔を思い浮かべて、それらを乗り越えてきました。しかし、コロナウイルスは全国からの参加者が東京で一堂に会することを許してくれませんでした。委員長であった私の役割は、予定していた形での開催を中止とし、参加予定者及び実行委員の安全を守ることでした。一生懸命準備してきたものを自分自身で断念するというのは、本当に辛い決断でした。何とかして違う形で開催できないかと検討を重ね、オンラインでの開催を見出しました。過去にない初めての試みで不安や反対もありましたが、無事開催できたことを心から幸せに思いました。諦めない気持ちや、新たなチャレンジの大切さを学ぶことができました。

自治会役員として本活動に参画できたことに心より感謝いたします。本当にありがとうございました。

## 中高部芸術鑑賞会

2020年度の芸術鑑賞会は当初9月に予定されていましたが、新型コロナウイルスの影響による行事変更に伴い、夏休み前の特別時間割である8月4日(火)に実施されました。今年度は演劇によるパフォーマンス及びワークショップを本校講堂にておこなう予定でしたが、感染拡大防止の観点からJS別の2回公演、講堂では2学年が鑑賞し、残り1学年はリモートでおこないません。また前半のパフォーマンスについてはあらかじめ撮影された動画を視聴し、後半のワークショップは社交館と講堂を結んで、演出家中屋敷法仁氏と生徒との質疑応答の形式となりました。

劇団『柿食う客』は2006年に結成された若い劇団であり、その代表の中屋敷氏は演劇の演出とともにクリエイターとしてゲームの脚本などにも活躍されている方です。今回は「高校生のための演劇プロジェクト」として、高校の国語教科書でおなじみの芥川龍之介『羅生門』、中島敦『山月記』とカフカの『変身』を素材としたパフォーマンスを視聴した後、その感想や気づきなどについてリモートを通じて共有しました。演劇の見方や演出の工夫など、さまざまな視点からの問いかけに対する中屋敷氏の明快で的確な言葉は、演劇を深く愛する生徒のみでなく演劇になじみのない生徒にも、心に響く機会となったと思います。

コロナ禍における新しい表現の手法の可能性を試みる場としても意義ある機会であったと思います。

(中高部視聴覚委員会)



## S 校内大会

2020年度のS校内大会は、新型コロナウイルスで休校の期間もあって、いつもより遅い1学期期末試験終了後の7月27日(月)におこなわれました。

種目は、コロナ防止対策として、いつものバスケットボールは、Catch the tail (しっぽとり)に代わりました。そして、他にソフトボール、バレーボール、卓球、普通のリレー走と借り物競争を入れたリレー走が企画されました。

当日、朝のうちは生憎の雨だったので、ソフトボールはドッジボールになり、新種目 Catch the tail (しっぽとり)とも盛り上がりました。

午後からは雨も上がり、リレーは2レースとも借り物競争を入れたリレー走に代わり、おこなわれました。試合は、ボールの使用後の消毒や試合に出るとき以外のマスク着用をしながら、外でのリレー走以外、無観客でおこなわれました。久しぶりに、行事好きの神戸女学院生の動きや楽しい笑顔を見ることができ、嬉しく思いました。

S体育部長、副体育部長が率先し、幹部と中心になり、部員を加えてよく頑張り、新種目や予防対策も考えられていました。そして、当日も体育部全員の審判や運営、裏方としての入念な準備の成果が見られました。

また、この行事がS3体育部員の最後の仕事となり、今後はS2体育部へと仕事が引き継がれます。S3体育部員の皆さん、1年間ご苦労様でした。

## 2020年度結果

〈しっぽ取り〉

1位 S 3 B 2位 S 3 A 3位 S 3 C

〈バレー〉

1位 S 3 C 2位 S 1 A 3位 S 3 B

〈ドッジボール〉

1位 S 2 A 2位 S 2 B 3位 S 2 C

〈卓球〉

1位 S 1 B 2位 S 1 C 3位 S 1 A

〈リレー借り物競争〉

Aブロック 1位 S 1 C

Bブロック 1位 S 2 A

〈総合〉

1位 S 3 B 2位 S 3 C 3位 S 1 C

ブービー S 2 C

(S体育部顧問)

## 2020年度 J 校内大会

2020年度J校内大会が7月28日(火)におこなわれました。実施種目はドッジボール、卓球、リレーです。今回はコロナ禍での実施ということもあり、試合が終わるごとに使用した用具やボールを消毒したり、密を避けるために無観客でおこなうなど感染予防を徹底し実施しました。制限が多い中での開催となりましたが、生徒たちは勝利を目指し、熱戦を繰り広げていました。試合結果は以下の通りです。

ドッジボール a	ドッジボール b
優勝 J 3 A	優勝 J 3 A
2位 J 3 C	2位 J 1 B
3位 J 2 A	3位 J 1 C

卓球 a	卓球 b
優勝 J 3 C	優勝 J 3 C
2位 J 3 A	2位 J 2 B
3位 J 2 A	3位 J 1 B

リレー	総合成績
優勝 J 3 C	優勝 J 3 C
2位 J 2 A	2位 J 3 A
3位 J 3 B	3位 J 2 A

ブービー賞

J 1 C J 1 D

(J校内大会係)

## 2020年度中高部文化祭

文化祭の準備は例年、前年の11月からはじまっています。今年度も12月に文化祭テーマが決まり、2月にはポスターの募集をするところまでできていました。しかし3月から休校となり、4月以降も休校とリモート授業が続き、今年度の文化祭ができるのか全く見通せない状況となりました。いつまでこの状況が続くのかかわからず、文企（文化祭企画実行委員会）幹部メンバーには文化祭に向けて何も動くこともできない状態で学校再開を待ってもらうことになり、その期間は不安でとても長く感じられたことと思います。

6月から分散登校できる目途がたった頃から文企幹部メンバーと文化祭をどうするか話し合いました。そもそも開催できるかどうかかわからない、準備をしても中止になるかもしれないという状況でしたが、「舞台を無観客上演や動画で鑑賞するような形式になっても、展示が縮小されても、どんな形になってよいので文化祭をやりたい」というメンバーの強い意志もあり、開催の方向で動くことになりました。

感染症への対策のために展示方法や、幸い観客を入れることができましたが講堂座席数などにかなり制限がかかり、これまでになかった点を配慮しなければならぬことが多く、それらへの対応をどうするかというところも一から考えていかななくてはなりません。準備のために活動できる時間も制限され、夏休みも変則的でありハーサルなどの日程が少なくなってしまいました。

日程が短縮され、校内生のための文化祭となったものの、ふたを開けてみればプログラムはほぼ例年の内容に近いかたちで開催することができました。ハプニングもありましたが日々変わる状況にも手探りで対応しつつ、でもできる限りのことをしようという生徒たちの強い意志と頑張り、何より文化祭をしたいという皆の願いがそれを可能にしたのだと感じています。

ご家族をはじめ外部の方々に生徒たちの活動を見ていただけなかったことが心残りですが、万が一のために撮影していた出演団体の動画を後日期間限定の配信で観ることができるようにしました。

多くの行事が中止となっていた中で、生徒たちの久しぶりに生き生きとした表情や姿を見ていますと、様々に心配をしながらも文化祭ができて良かったと実感しています。誰も感染症にかかることもなく過ごせたことも幸いでした。改めて、異例の文化祭を最後まで引っ張ってってくれた文企幹部・メンバーの皆さん、文化部をはじめ、各クラブ・学年の生徒の皆さんに本当にお疲れ様、ありがとうございますと伝えたいです。ご家族でお支えくださった保護者の皆様にも厚く御礼申し上げます。

また、多くの教職員のご理解とご協力がなければ開催に漕ぎつけることはできませんでした。中高部のみならず、大学の職員の方々にも大変お世話になりました。一部のプログラムを全校生徒が中継で見られるようにすることは今回初めてのことで、技術的にも実際の作業においても色々ご指導をいただき、無事に終えることができました。

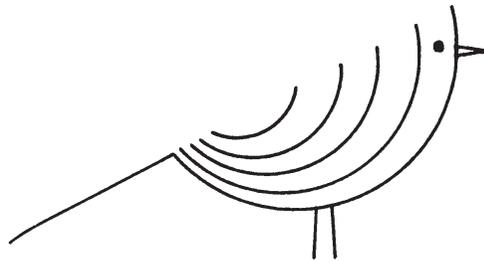
多くの方々の尽力と、神様のお守りの内に今年度の文化祭を終えることができたこと、心から感謝いたします。

(2020年度文化祭企画実行委員会顧問)

### 校内読書感想文コンクールについて

今年度も夏休み中、J2とS2は宿題で、その他の学年は自由参加で校内読書感想文コンクールをおこなった。先生方から推薦された優秀作を、図書委員の先生方が審査して、入選作を決定した。11月30日(月)の礼拝時に、校内コンクールの表彰式をおこない、高等学部2年生の生徒が自作の朗読をした。また、校内選考で決定された優秀作は第48回兵庫県私立学校読書感想文コンクールへ応募し、特選(5名)、入選(1名)に入賞した。

(中高部図書室司書教諭)



## 2020年度中学部キャンパス見学会報告

今年度の中高部キャンパス見学会は、当初は11月21日(土)実施予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況も鑑み、来校者を招かない、完全オンライン型で実施しました。

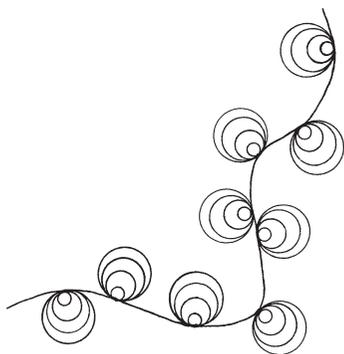
10月13日(火)～11月4日(水)の期間で、中高部ホームページ上に申し込み用フォームを設けて受け付け、後日、お申込みいただいた方々に必要書類(学校案内・教科紹介を含めたキャンパス見学会資料、特設サイトのURLを記載した用紙、記念品の紙袋・ペンケース・クリアファイル)を着払い(400円以内)でお送りしました。

キャンパス見学会特設サイトは11月19日(木)～25日(水)の期間で開設しました。

特設サイトの内容は、動画を中心として、中学部入試のご案内(先に実施した中学部入試説明会と同じ内容)、キャンパスの紹介(中学部自治会生徒によるナレーション(日本語と英語の2種類)を含めた360°VR動画)、模擬授業(英語3種類、物理、化学、国語、世界史、聖書)、クラブ活動紹介(クラブで制作した作品の紹介、ESSによる劇、漫画イラスト研究部によるイラストの描き方)、礼拝紹介(中高部生徒が担当した奨励を文章で読めるページ)を準備しました。

これまで実施してきたキャンパス見学会とは勝手の違う面も多々ありましたが、中高部教職員・生徒の皆様にご多大なご協力をいただきながら進めることができました。この場を借りてお礼申し上げますとともに、このキャンパス見学会が中高部の魅力を伝える場になっていきますことを願います。

(中高部校務課広報係)



## &lt;課外活動紹介&gt;

## [クラブ] Jバレーボール部

今夏の総体の代替となる西宮市交流大会でなんと準優勝しました。コロナ禍で満足に練習もできないなか、効果的な練習、そして何度も重ねたミーティング、そしてSバレーボール部の協力があったりどりで着けた結果だと思えます。

またうれしいことにJ1が15人も入部し、Jだけで33人の大所帯に。密を避けるために、学年ごとに練習時間を分けるなど工夫し、秋の新人大会では予選2位、8シードをとりました。今後も感染に気をつけながら、全員で成長し続けたいと思います。

(Jバレーボール部顧問)

## [クラブ] J書道部

J書道部は、火・金曜日の週2日、年に数回ある大会に向けた作品を練習したり、手本を参考にしていろいろな種類の字体を練習したりしながら、楽しく活動しています。長い時間をかけて1つの作品に取り組み完成させる達成感や嬉しさは、なかなか味わうことのできない貴重なものです。先生から丁寧に添削していただけるだけでなく、部員同士でもアドバイスをし合っていて、とても賑やかな雰囲気です。先輩と後輩の距離が近い、少人数ならではのアットホームさも書道部の魅力の1つです。

(J書道部顧問)

## [クラブ] Sフットサル部という存在

高等学部 2年生

私たちSフットサル部は、主に毎週火・木曜日、たまに月・木曜日の日程で活動しています。フットサルとは言っても名ばかりで、やっていることはサッカーと同じなのですが、人数が少ないので、Jサッカー部のミニゲームに混ぜてもらったりもしています。前から参加したいと部員同士で言い合っていたインターハイも、今のところ全く目処が立っておらず、現在部内最高学年のS2部員はJS通して公式戦を戦うことができなさそうです。この先、いつか参加できることを願っています。

## [クラブ] Sギター部

高等学部 3年生

Sギター部は、5月のバザー、9月の文化祭、11月の宗教強調週間の礼拝、12月の聖なる集いの年に4回の舞台発表を中心に活動しています。ところが、今年度は新型コロナウイルスの影響で演奏発表が中止、又は大きく限定された中で実施せざるをえなくなりました。そうした状況にあって、バザー演奏予定曲を在校生・卒業生対象としたインスタグラムでのライブ配信が実現できたことは、新しい生活様式におけるクラブ活動のあり方を考える上で、大きな収穫を得る機会となったと思っています。

## 〈学院日誌〉

8月23日(日)	オープンキャンパス	10月28日(水)	理事会 臨時評議員会 臨時理事会 中高部教員会議
8月26日(水)	中高部教員会議	10月31日(土)	愛校バザー (中止)
8月30日(日)	オープンキャンパス	11月4日(水)	中高部教員会議
9月2日(水)	中高部教員会議	11月18日(水)	中高部教員会議
9月10日(木)	中高部文化祭① (校内用のみ)	11月19日(木)~25日(水)	中高部キャンパス見学会 (オンライン開催)
9月11日(金)	中高部文化祭② (校内用のみ)	11月20日(金)	教授会
9月13日(日)	オープンキャンパス	11月25日(水)	理事会
9月16日(水)	中高部教員会議	11月28日(土)	2019年度ご寄付者対象 神戸女学院教育振興会感謝の集い (中止)
9月25日(金) ~10月5日(月)	中学部入試説明会 (オンライン開催)	12月2日(水)	中高部教員会議
9月30日(水)	理事会 中高部教員会議	12月13日(日)	オープンキャンパス
10月5日(月)~8日(木)	高等学部修学旅行	12月18日(金)	教授会
10月7日(水)~9日(金)	中学部小旅行	12月22日(火)	中高部教員会議
10月9日(金)	合否判定教授会	12月23日(水)	理事会
10月14日(水)	中高部教員会議		
10月16日(金)	教授会		
10月19日(月)	第3回学長候補者選考委員会		

## 目 次

コロナ禍、創立145周年 (2020年)、 そして創立150周年 (2025年)……………	1
「150周年メッセージ」制定について……………	4
神戸女学院教育振興会寄付金のご報告……………	4
創立145周年記念 神戸女学院愛校バザー中止について…	4
KCC だより ……………	5
2020年度 宗教強調週間……………	10
留学報告……………	13
史料室の窓・女学院生は演劇がお好き……………	15
大学報告	
「新入生の会」開催報告……………	16
コロナ禍での学びを継続させるための取り組み…	16
今年度の入試広報活動について……………	19
「メイド・イン・バングラデシュ」を考える…	19
留学報告……………	20
音楽学部夏期講習会報告……………	23

夏期インターンシップ実施報告……………	23
インターンシップ参加報告……………	24
大学教授会研修会報告……………	24
中高部報告	
第48回高校生英語弁論大会報告……………	25
EGMO 日本代表に選ばれて……………	25
習慣づくりの先に得たもの……………	26
日本生徒会大賞2020奨励賞……………	26
中高部芸術鑑賞会……………	27
S 校内大会……………	28
2020年度 J 校内大会……………	28
2020年度中高部文化祭……………	29
校内読書感想文コンクールについて……………	33
2020年度中学部キャンパス見学会報告……………	34
課外活動紹介……………	35
学院日誌……………	36

下記ページは個人情報保護等のため掲載しておりません。ご了承ください。

6、11、12、14、30~32